半世紀の孤独
――谷口幸男『ルーネ文字研究序説』(1971) とその後

小澤 実

1　谷口とルーン文字の出会い

谷口幸男（1929–2021）は本邦最高の北欧中世学者である．別稿で述べたように，谷口は，古アイスランド語やラテン語で著された北欧中世の古典から，優に 3000 ページを超える文献を邦訳した[1)]．書籍として流通する代表的な作品を挙げるだけでも,『エッダ』,『アイスランド サガ』, サクソ・グラマティクス『デンマーク人の事績』，オラウス・マグヌス『北方民族文化誌』，スノッリ・ストゥルルソン『ヘイムスクリングラ』のような，北欧中世研究にとっての基本書を，谷口は一個人で訳している．これは世界のどの言語にあっても誰も凌駕し得ない個人業績である．

卒業論文でカフカを扱い，大学院進学後はゴート語を含むゲルマン語学の研究に没頭した谷口は，語法や表現技法に関する論文を矢継ぎ早に出し，気鋭の言語学者として学界での評価を得た．1958 年から 59 年にかけてミュンヘン大学留学中にアイスランド語の文献を知り，1967 年から 68 年のキール大学北欧研究所への留学を機に，ハンス・クーン教授の指導のもと本格的な北欧中世の研究に入った．谷口とルーン文字との出会いは，以下のように記されている．

> 大学の講義題目に非常勤講師によるルーン学入門がでていた．助手のヤンセン氏に相談すると，あんな退屈な講義には出ないほうがまし，

1)　谷口の翻訳業績については，小澤実「かくて円環は閉じる―谷口幸男の翻訳活動と戦後日本の北欧中世研究」『立教大学日本学研究所年報』20（2021）：13–26 頁.

それより H. アルンツの『ルーン学便覧』を読んだら，といわれ，アルンツを初め研究室の本を読んだ[2)].

つまり，谷口が最初に読み込んだルーン文字の研究は，ドイツで最も人口に膾炙していた定評あるアルンツの概論であったことがわかる．キールから帰国後谷口は，原典翻訳とゲルマン民俗の研究に加えて，ゲルマン人のコミュニケーション手段であったルーン文字の研究も進めた．最初の成果として谷口は「エッダ，サガ，碑文に現れたルーネ文字の効用」（1970）を発表した[3)]．この論文の目的は，エッダやサガで確認できるルーン文字の呪術的用法を援用しルーン碑文を解釈することにある．本稿は，いくつかのルーン概論と研究書に依拠し，古フサルクから新フサルクで書かれたルーン碑文全体をゲルマン人の心性と慣習に位置付ける野心的な試みである．

ルーネ（Rune）という表現から分かるように，谷口のルーン理解は，留学先のドイツにおける研究蓄積に基づいていた．ヘルムート・アルンツ（Helmut Arntz, 1912–2007）とヴォルフガング・クラウゼ（Wolfgang Krause, 1895–1970）というゲッティンゲン大学のドイツ・ルーン学の成果をベースに，日本ではまだ十分に理解も受容もされていないゲルマン人の文字であるルーン文字の呪術的側面を紹介した「ルーネ文字の効用」は，本邦におけるルーン文字研究の嚆矢と言って差し支えない．ムーアハウス（ねずまさし訳）『文字の歴史』（岩波新書，1955）においてもオガム文字と並んでルーン文字の簡単な説明はあるし，冒頭にルーン文字解読場面のあるジュール・ヴェルヌ『地底旅行』（講談社，1955）の解説でもルーン文字についての記述はあった．戦後の言語学者や文学者も研究上の必要性からルーン文字についてのおおよその知識は身につけていたことは想定してよい．しかし，現地の研究文献と碑文テキストに基づきルーンの社会的役割をモノグラフとして論じたのは谷口「ルーン文字の効用」が初めてである．ルーンの呪術的側面に注目した本稿は，ゲルマン学にとっての分水嶺でもあると同時に，

2）「ドイツのルーン石碑」本書第Ⅱ部第 1 章：211 頁.

3）『広島大学文学部紀要』29-2（1970）：160-184 頁［「10 ルーン文字と呪術」『ゲルマンの民俗』（溪水社，1987）：232-261 頁］.

1970年代から80年代の戦後ファンタジー・ブームやオカルト・ムーブメントの中で現れつつあった「神秘の文字」としてのルーン文字理解と関わる内容でもあった[4]．戦後のファンタジー作家やオカルト・ルーン論者が，地方大学の紀要に掲載された本稿を利用する機会があったかどうかは措くとして，1970年という時点で学問的に正しい手続きを経たルーン文字の呪術的解釈をパブリックに表明しているという点で，本稿は研究並びにルーン文字の日本的受容という双方の点から注目に値する．

2 『ルーネ文字研究序説』

「ルーネ文字の効用」の刊行翌年，谷口は，当該論文の内容を敷衍するかたちで瞠目すべき業績を刊行した．勤務先であった広島大学文学部の紀要別冊として，冊子を丸々利用し，『ルーネ文字研究序説』（以下『研究序説』）を刊行した[5]．全体で140ページを超える労作である．1965年以降サガの翻訳を，1973年に『エッダ』を，1979年には『アイスランド サガ』を刊行することを思えば，谷口は，マルチタスクで同時にいくつもの仕事を抱えていたことになる．

本論考は，谷口が留学先のキール大学で読み込んだルーン研究に基づき，谷口の関心に従って再構成した研究である．ルーン文字の概観はすでに先行論文で試みていたが，『研究序説』では，さらに多くの事例を用いルーン文字全体の概観を試みている．それは，研究史を紹介した上でルーン文字研究の意義を整理した第1部「ルーネ文字：所在と研究の歩み」，ルーン文字研究において最も長く議論されてきた文字の起源に関する第2部「ル

4）　戦後ファンタジー・ブームやオカルト・ムーブメントとルーン文字との関係の整理は今後の課題である．瀬田貞二による『指輪物語』（評論社）の翻訳は1971年に刊行が始まった．以下の文献ではルーンに関する記述は確認できない．ASIOS編著『昭和・平成オカルト研究読本』（サイゾー，2019）；秋山眞人（協力布施泰和）『日本のオカルト150年史』（河出書房新社，2020）．

5）『広島大学文学部紀要』30特輯号1（1971）．一般向けに「ルーネ文字の話」（『北欧』5（1974）：136-145頁）も執筆している．なお本稿が出た翌年，野村亨「ルーン文字」（『史友』4（1972）：17-37頁）は，谷口とは別個にルーンの概観を試みている．

ーネ文字の起源」，ルーン文字の意味や音価の変遷を整理した第3部「ルーネ文字の構造」，ゲルマン時代から中世にかけてルーン文字がどのように利用されてきたのかを背景の社会と重ねて説明した第4部「ルーネ文字の用法―ルーネの明かす文化像」，ゲルマン時代から近代に至るまでのルーン文字の変遷を整理した第5部「ルーネ文字の歴史」から構成されている．

以上を踏まえて『研究序説』の特徴を指摘しておきたい．第一に全体が言語学的アプローチ（第2部と第3部）と文化史的アプローチ（第4部と第5部）に大きく分かれている点である．ルーン文字研究にはさまざまなアプローチ方法があるが，今なお，谷口の選択した2つのアプローチに大別されているように思われる．例えば本邦においても，今世紀に入って執筆された簡単なルーン文字概論のうち言語学者の秦は前者を，歴史学者の小澤は後者を選択した[6]．その意味で『研究序説』は，日本のアカデミアで参考にすべき先行研究がない半世紀前の時点で，いずれかのアプローチに偏ることなくルーン研究の全体構造を示したということができる．

第二に，谷口は，前述の2つのアプローチを有機的につなげることで，人類社会の展開の中でルーン文字を位置付けようとしている点である．谷口は，各国のナショナリスティックな感情で歪みがちな（実際歪んできた）第2部の文字起源論を閉じるにあたって，以下のように述べる．「とにかく，有史前から長い文化を持っていたゲルマン人が紀元前数世紀から大陸の民族の優秀な文化と接触交流するに及び自国の文化を改めて再認識し，神託のような習俗や実用から文字の必要を感じ，南方の文字と習俗の影響の下に独特のルーン文字を工夫したと考えて良かろう」[7]．ここにおいて谷口は，ルーン文字の起源に関して，特段どこの国の起源論にも肩入れすることなく，現在でも通用する穏当かつ妥当な結論を得ている．それは谷口が，中立的な日本人だからという面もあろうが，ルーン文字のみならず多くの言

6）　秦宏一「ルーン文字」河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著『言語学大辞典　別巻　世界文字辞典』（三省堂，2001）：1137-1142頁に加えて，河崎靖『ルーン文字の起源』（大学書林，2017）も参照；小澤実「ルーン文字」大城道則編著『図説古代文字入門』（河出書房新社，2018）：79-85頁．小澤による研究社ウェブマガジン *Lingua* での連載「ルーン文字の遍歴」（https://www.kenkyusha.co.jp/uploads/lingua/prt/20/runes2010.html）も参照．

7）　本書58頁．

語や文字を研究してきたことや言語に止まらないゲルマン文化一般に関心を持ったことにも原因を求められる．

そして第三に，第4部に顕著に見られるように，ルーン文字を同時代のゲルマン文化史の中に位置づけ，そのゲルマン文化の中核の1つにルーン文字を置いていることである．谷口の関心は，『研究序説』の翌年に刊行された「ゲルマン人における“聖なるもの”―言語学的・宗教的理解―」(1972) を境に言語から民俗文化に移行し[8]，1980年ごろまでゲルマン文化に関する論考を立て続けに刊行した．そう言った意味では，『研究序説』におけるルーン文字文化論は，その後の谷口の研究の方向性を規定する重要な試みであったことが理解できる[9]．加えて第1部では，初期近代以来のルーン文字研究の研究史もまとめることで，言語思想文化史としての可能性も用意している．谷口は学問史に対しても関心があり，その後の論考でもグリムをはじめとして学問史的位置づけを試みているが，本稿がその出発点となる[10]．そう言った意味でも『研究序説』は谷口の学術活動にとって転換期の作品ということができる．

3　80年代以降のルーン文字研究

『研究序説』以降，日本における中世北欧の認知度と解像度は徐々に高

8）『広島大学文学部紀要』31-2（1972）:85-106頁［「5　ゲルマンの“聖なるもの”」『ゲルマンの民俗』109-133頁］.

9）例えば，「ゲルマン人の葬送と死の観念」『広島大学文学部紀要』32-2（1973）：141-161頁；「ゲルマン人と夢」『広島大学文学部紀要』33（1974）：354-374頁；「ゲルマン人の死刑」『広島大学文学部紀要』34（1975）：245-260頁；「誕生の民俗―ドイツの民俗を通して見た」『広島大学文学部紀要』36（1976）：259-278頁；「結婚の民俗―ドイツの民俗を通して見た」『広島大学文学部紀要』37（1977）：326-346頁；「死の民俗―ドイツの民俗を通して見た」『広島大学文学部紀要』38（1977）：305-325頁．これらの多くは谷口『ゲルマンの民俗』に収められている．

10）本書収録の「ドイツのルーン碑文」では，ドイツにおけるルーン学研究史について紙幅を割いている．グリムについては，谷口幸男「ヴィルヘルム・グリムの北欧研究について」『広島大学文学部紀要』45（1986）：348-370頁［『日本アイスランド学会公刊論集』5（1985・86）：1-25頁）；『ドイツ・ロマン派全集15　グリム兄弟』（国書刊行会，1989）：370-376頁］.

まった．その中心にいたのはもちろん翻訳と研究を通じて紹介を続けた谷口であるが，1980 年に結成された日本アイスランド学会につどう歴史学の熊野聰（1940–），文献学の菅原邦城（1942–2019），神話学の水野知昭（1945–2005）らもまた，谷口の仕事を引き取った上で現在の中世北欧研究の基礎となる成果を上げ，さまざまな出版物を通じて社会における北欧中世の認知度を高めた[11)]．

このような中，北欧学もしくは英学の一環としてルーン文字への関心も高まった．いくつかの成果を上げておきたい．ひとつは清原瑞彦の一連の論考である．西洋史学という枠組みを堅持した清原は，歴史史料としてルーン石碑を用いてヴァイキング社会にアプローチする論考を立て続けに刊行した[12)]．熊野聰がアイスランド・サガを，伏島正義が地方法を利用しながら北欧中世社会を論じたのに対し，清原の論考は，史料の可能性を広げるという点でも貴重な試みであった．2 つ目は吉見昭徳による中世学者・ルーン学者エリオット（Ralph Warren Victor Elliott, 1921–2012）の訳文の紀要連載である[13)]．ユダヤ系ドイツ人の家系に生まれたエリオットはナチ政権の迫害を恐れ家族でイギリスに移住し，セント・アンドルーズ大学で教鞭をとっていた1959年にルーン文字の教科書を執筆した．ドイツ・ルーン学の成

11）戦後日本における中世北欧の受容の諸相は，小澤「かくて円環は閉じる」に加え，同「阪西紀子の社会史」阪西紀子『北欧中世史の研究―サガ・戦争・共同体』（刀水書房，2022）：253-264 頁；同「解説『北の農民ヴァイキング』から『ヴァイキングの歴史』へ」熊野聰『ヴァイキングの歴史：友情と実力の社会』（創元社，2017）：283-295 頁を参照．アイスランド学会に関しては，菅原邦城「日本アイスランド学会―研究者の結集と活動」小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための 65 章』（明石書店，2016）：386-389 頁．

12）清原瑞彦「ルーン碑文によるスウェーデンと後期ローマ帝国及びイングランドとの交渉：6 世紀と 11 世紀を中心に」『関学西洋史論集』8（1978）：15-29 頁；同「ルーン碑文によるスウェーデンと kirikium との交渉について」『北海道東海大学紀要（人文社会科学系）』2（1989）：59-75 頁；同「ルーン碑文によるスウェーデンと anklanti との交渉について：ウップランド地方を中心に」『北海道東海大学紀要（人文社会科学系）』4（1991）：67-80 頁；同「ルーン碑文によるヴァイキング時代―スウェーデンを中心に」『北海道東海大学紀要（人文社会科学系）』16（2003）：23-55 頁；同「史料研究　ルーン碑文によるヴァイキング時代の研究―スウェーデンを中心に」『関学西洋史論集』28（2005）：57-69 頁．

13）R. W. V. エリオット（吉見昭徳訳）「ルーン文字の用途」（『明治学院論叢』465（1990）：63-105 頁）以降，断続的に同紀要に翻訳が掲載されている．

果に基づく，英語による初めての体系的なルーン文字概論である[14]．1990年に吉見が手をつけた本書の訳業は最終的に単行本として結実した[15]．3つ目は，ケンブリッジ大学のルーン学者レイモンド・ページ（Raymond Page, 1924–2012）の小著の翻訳である．菅原邦城によって翻訳された本書は，大英博物館が一般向けに用意した古代言語シリーズの１冊である[16]．本書はイングランドの事例を多く用いつつもルーンの歴史全体に目配りをした好著であった．大学の紀要に掲載されたため『研究序説』やエリオットの翻訳が容易に入手できなかったことを考えると，ページの本は，小著とはいえ，日本におけるアカデミックなルーン理解に大きな役割を果たした．

この間，谷口のルーン研究はどのように進展していたのだろうか．『研究序説』が執筆されたまさに1971年に，日本は固定為替から変動為替へと移行し，研究者による自由な海外出張も可能となった．キール大学留学中も北欧各地を訪問していた谷口だが，1981年にはゲッティンゲン大学のルーン学研究室に留学した．ここでは，ヴォルフガング・クラウゼの学統をつぐクラウス・デューウェル（Klaus Düwel, 1935–2020）の配慮により，ルーン研究室を自由に利用することができた[17]．その時に知り合ったのが気鋭のルーン学者ウルリヒ・フンガー（Ulrich Hunger）であり，ドイツにおけるルーン学の事情を彼から学んだ[18]．留学中にはコペンハーゲン国立

14）エリオットの出生名はルドルフ・エーレンベルクであり，スコットランドの後はオーストラリアに移住した．Ralph Elliott. “One life, two languages”, A. Oizumi, and T. Kubouchi (eds.), *Medieval English Language Scholarship. Autobiographies by Representative Scholars in Our Discipline*. Hildesheim and New York: Olms, 2005, pp. 30-47.

15）R. W. V. エリオット（吉見昭徳訳）『ルーン文字の探究』（春風社，2009）．ただし固有名詞の読み方や北欧理解に難が多く，利用には注意が必要である．

16）Raymond I. Page, *Runes* (Reading the past series). London: British Museum Press, 1987. 彼の主著は*An Introduction to English Runes*. 2nd ed. Woodbridge: Boydell Press, 1999 (originally 1973). ルーンに関する論集は，*Runes and Runic Inscriptions: Collected Essays on Anglo-Saxon and Viking Runes*. Woodbridge: Boydell Press, 1999.

17）18世紀からグリム兄弟を経てナチズム期，そして現代に至るまでのゲッティンゲンでのルーン研究を位置づけているのは，Klaus Düwel, “Runenforschung in Göttingen“, Sebastian Brather , Dieter Geuenich und Christoph Huth (hrsg.), *Historia archaeologica: Festschrift für Heiko Steuer zum 70. Geburtstag*. Berlin: De Greyter, 2009, pp. 623-660.

18）Ulrich Hunger, *Die Runenkunde im Dritten Reich: Ein Beitrag zur Wissenschafts- und Ideologiegeschichte des Nationalsozialismus*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1984.

博物館のエーリク・モルトケ（Erik Moltke, 1901–84）と面談したが，ノルウェーのアスラク・リーストル（Aslak Liestøl, 1920–83）には会えずじまいであった．いずれにせよこの滞在中に，文献収集に加えて，デンマーク，ゴットランド，アイスランドなどのルーン碑文を実見することが可能となったことから，谷口のルーン文字に関する知見は，『研究序説』刊行時よりもはるかに広く深いものになっていたことは想定してもよい．

ゲルマン人の民俗研究や翻訳活動に集中していた谷口は，1990 年代に入り，再びルーン文字に関する論考を立て続けに刊行した．エッセイ「ルーン文字をたずねて」（1991）で 20 年来のルーン研究の成果を振り返ったのち，『研究序説』ではほとんど触れることのなかった地域のルーン碑文についてまとめた論考を次々に発表した[19]．「アイスランドのルーン碑文」（1994）では，アイスランドで発見されたルーン碑文を校訂した A・ベクステズ（Anders Bæksted, 1906–68）の刊本に依拠しながらアイスランドのルーン碑文を検討し[20]，なぜアイスランドでは本土のように多数のルーン碑文が作成されたなかったのかを考察した．「ヴァイキングの町ハイタブ」（1995）では，キール大学への留学時に何度も実見していた，ユトランド半島の付け根のシュライフィヨルドの奥に位置する交易地ハイタブ（ヘゼビュー）にある碑文を紹介した．「ドイツのルーン碑文」（1996）では，グリム以来のドイツにおけるルーン研究を学問史的に位置づけ，ドイツで発見されたルーンを概観した．「グリーンランドのヴァイキング」（1996）では，グリーランドへの植民とその後の展開を整理する中で，グリーンランドで発見されたルーン碑文をも取り上げた．そして「ベルゲン出土のルーン碑文」（2001）では，ノルウェーの中世都市ベルゲンで発見された 12 世紀から 14

19）「アイスランドのルーン碑文」『大阪学院大学国際学論集』5-1(1994)：39-62 頁［『日本アイスランド学会公刊論集』11（1994）：89-114 頁）］；「ヴァイキングの町ハイタブ」『大阪学院大学通信』26-12（1995）：79-93 頁［『日本アイスランド学会公刊論集』12（1995）：273-288 頁）］；「ドイツのルーン碑文」『広島ドイツ文学』10（1996）1-12 頁［『日本アイスランド学会公刊論集』12（1995）：259-272 頁）］；「グリーンランドのヴァイキング」『大阪学院大学通信』27-9（1996）：55-68 頁［『日本アイスランド学会公刊論集』13（1996）：3-16 頁）］；「ベルゲン出土のルーン碑文」『大阪学院大学国際学論集』12-1(2001)：53-73 頁．

20）Anders Bæksted, *Islands Runeindskrifter*. København: Munksgaard, 1942.

世紀の木簡資料の中から興味深い情報を与えてくれるテキストを紹介した．

一見すると『研究序説』で触れることのなかった「周縁の」ルーン碑文を落ち穂拾いしているようにも見える．谷口には，その後の留学や研究で『研究序説』で概観したよりもはるかに広いと認識できたルーン文字の世界を，自分が生きている間に一通り紹介しておきたい，という気持ちがあったのかもしれない．谷口は定年後の最後の仕事として残していた『ヘイムスクリングラ』の翻訳に集中するために，1971年の『研究序説』と73年の『エッダ』では紹介することのできなかった「周縁の」ルーン碑文と散文エッダを，2003年の定年前に勤務先紀要に掲載することで，谷口なりにルーン文字とエッダの研究を完成させたと言っては穿ち過ぎだろうか[21]．

4　半世紀の孤独と21世紀のルーン学

最後に，谷口がルーン研究を終えた後の，世界におけるルーン研究の現状の一端を３つの観点から一瞥しておきたい．

第一に研究分野の拡大である．谷口が『研究序説』を執筆する際に依拠した研究が刊行されていた時代は，ルーンの起源や文字の変化といった言語学的なアプローチのモノグラフがおおよそを占めていた．もちろん谷口の関心もそこにあったため，『研究序説』は世界のルーン研究の流れに棹さす内容であったといえるが，研究者人口が増加し国ごとの研究潮流がいくつも生まれている現在，ルーン研究の内容も多様となっている．各出版社からルーンに関する研究を多数含むシリーズが刊行されるとともに[22]，例えば，ルーンの宗教性，ルーンと権力の関係，ルーンのビジュアル的側面，中世ルーンへの関心，ルーンの受容史などが盛んになっている[23]．谷

---

21)『スノリ「エッダ」「詩語法」訳注』(『広島大学文学部紀要』特輯号 3), 1983）［『日本アイスランド学会公刊論集』3（1983）：33-155 頁)］；同「スノッリ・ストゥルルソン『エッダ』「序文」と「ハッタタル（韻律一覧)」訳註（１）（２）（３完)」『大阪学院大学国際学論集』13-1（2002)：203-230 頁；13-2（2002)：125-154 頁；14-1（2003)：99-130 頁.

口との関係で言えば，谷口が関心を持っていたグリムによる記念碑的な論文『ドイツのルーンについて』（*Ueber deutsche Runen*）も，詳細な解説のついた校訂やルーン学者らによる研究が刊行された[24)]．

第二に補足的な刊本とオンラインカタログの登場である．ルズヴィ・ヴィマー（Ludvig Wimmer, 1839–1920）が 19 世紀に信頼に足るデンマークの碑文刊本を刊行して以来，国家単位での刊本が用意され，さまざまな雑誌に新発見のルーン碑文は紹介されてきた[25)]．『研究序説』を執筆した時点で，谷口は，ドイツ，デンマーク，ノルウェー，スウェーデン，アイスランドなどの校訂カタログは入手できたが，その後，研究成果を反映したカール・

22）*Ergänzungsbände zum Reallexikon der Germanischen Altertumskunde* (Berlin: De Gruyter, 1986-); *Runrön. Runologiska bidrag utgivna av Institutionen för nordiska språk vid Uppsala universitet* (Institutionen för nordiska språk ved Uppsala universite, 1989-); *Utrecht Studies in Medieval Literacy* (Turnhout: Brepols, 1999-).

23）個別研究は枚挙にいとまがない．現状ではルーン研究を総括した動向論文も見当たらないため，ルーン研究に関する，もしくはルーン研究を多数含むいくつかの研究を上げるにとどめる．John McKinnell, Rudolf Simek with Klaus Düwel (eds.), *Runes Magic and Religion. A Sourcebook* (Studia Medievalia Septentrionalia 10). Wien: Fassbaender, 2004; Kristel Zilmer, and Judith Jesch (ed.), *Epigraphic Literacy and Christian Identity. Modes of Written Discourse in the Newly Christian European North*. Turnhout: Brepols, 2012; David M. Krueger, *Myth of the Rune Stone: Viking Martyrs and the Birthplace of America*. Minneapolis. MN: Minesota UP, 2015; Tom Birkett, *Reading the Runes in Old English and Old Norse Poetry*. Abingdon: Routledge, 2017; Else Mundal, and Amy Mulligan (ed.), *Moving Words in the Nordic Middle Ages: Tracing Literacies, Texts, and Verbal Communities*. Turnhout: Brepols, 2019; Sigmund Oehrl, *Die Bildsteine Gotlands. Probleme und neue Wege ihrer Dokumentation, Lesung und Deutung* (Studia archaeologiae medii aevi 3). Friedberg: LIKIAS, 2019; Laila Kitzler Åhfeldt et al., *Relations and Runes: The Baltic Islands and Their Interactions during the Late Iron Age and Early Middle Ages*. Stockholm: Swedish National Heritage Board, 2020; Bjørn Poulsen, and Rikke Steenholt Olsen (ed.), *Urban Literacy in the Nordic Middle Ages*. Turnhout: Brepols, 2021.

24）Wilhelm Carl Grimm, *Ueber deutsche Runen und Zur Literatur der Runen*. Mit einer Einleitung von Klaus Düwel et al. Hildesheim: Olms, 2009; Gerd Host Heyerdahl, “Wilhelm Grimm and the Study of Runes”, Elmer H. Antonsen (ed.), *The Grimm Brothers and the Germanic Past*. Amsterdam: John Benjamin, 1990, pp. 61-70. グリム兄弟と北欧との関係を論じたのは，Terry Gunnell (ed.), *Grimm Ripples: The Legacy of the Grimms' Deutsche Sagen in Northern Europe*. Leiden: Brill, 2022.

25）これらの流れについては，小澤実「北欧アイデンティティとしてのルーン文字」北欧文化協会・バルト＝スカンディナヴィア研究会・北欧建築・デザイン協会編『北欧文化事典』（丸善出版，2017）：168-169 頁；同「【書評】コンテクストの中のルーン：Terje Spurkland, *Norwegian Runes and Runic Inscriptions*. Woodbridge: Boydell & Brewer 2005, ix＋206 p.」『北欧史研究』23（2006）：91-99 頁を参照．

ハウクによる民族移動期のブラクテアト[26]，マイケル・バーンズによるブリテン諸島（ダブリン，ブリテン本土，マン島，オークニー）[27]，リスベス・イーメルによる北欧（古フサルクとグリーンランド）[28]，スネイダルによるアイスランド[29]，スヴァンテ・フィッシャーらによるフランス[30]，エーディト・マロルトらによるゲルマン圏（南ドイツとフリースラント）[31] などが刊行されている．他方で，テクストの電子化の進展に従って，ルーン碑文の電子データも入手可能になった．ウプサラ大学のルーン研究室が開発した Rundata が学界の共有資産として長年利用されてきたが，現在は，ゲッティンゲン学士院が推し進め，キール大学の北欧研究室が管理する RuneS（Runische Schriftlichkeit in den germanischen Sprachen）が，複数のデータベースを統合したポータルサイト兼統合検索の役割を果たしている[32]．

第三に新しい概論の登場である．1971 年時点で谷口が依拠した研究と

26）Karl Hauck et al., *Die Goldbrakteaten der Völkerwanderungszeit*. 3 vol. München: Wilhelm Fink, 1985-89.

27）Michael P. Barnes, Jan Ragnar Hagland, and R. I. Page, *The Runic Inscriptions of Viking Age Dublin*. Dublin: Royal Irish Academy, 2007; Michael P. Barnes, and R. I. Page, *The Scandinavian Runic Inscriptions of Britain* (Runrön 22). Uppsala: Institutionen för nordiska språket, Uppsala universitet, 2016; Michael P. Barnes, *The Runic Inscriptions of Maeshowe, Orkney* (Runrön 8). Uppsala: Institutionen för nordiska språket, Uppsala universitet, 2009; Michael P. Barnes, *The Runic Inscriptions of the Isle of Man* (Runrön 22). Uppsala: Institutionen för nordiska språket, Uppsala universitet, 2019.

28）Lisbeth M. Imer, *Jernalderens runeindskrifter i Norden* (Aarbøger for nordisk Oldkyndighed og Historie 2013 & 2014). 2 bd. København: Det Kongelige Nordiske Oldskriftselskab, 2015; Lisbeth M. Imer, *Peasants and Prayers: The Inscriptions of Norse Greenland*. Odense: University Press of Southern Denmark, 2017.

29）Þórgunnur Snædal, “Rúnaristur á Íslandi”, *Árbók hins íslenzka fornleifafélags* 96 (2000-2001), p. 5-68.

30）Svante Fisher et al. *Les Seigneurs des anneaux* (Inscriptions runiques de France, Tome I; Bulletin de liaison de l’AFAM, Hors Série n° 2). 2e éd. Paris: AFAM, 2008. ただしフランスにおけるルーン碑文の一覧を目的とするこのシリーズは以後刊行されていない．

31）Klaus Düwel, Robert Nedoma, und Sigmund Oehrl (hrsg.), *Die Südgermanischen Runeninschriften* (ERGA 119; Runische Schriftlichkeit in den germanischen Sprache 1). Berlin: De Gruyter, 2020; Livia Kaiser, *Runes across the North Sea from the Migration Period and beyond. An annotated edition of the Old Frisian Runic Corpus* (ERGA 126; Runische Schriftlichkeit in den germanischen Sprache 2). Berlin: De Gruyter, 2021.

32）サイトアドレス（https://adw-goe.de/forschung/forschungsprojekte-akademienprogramm/runische-schriftlichkeit/）．

刊本などを踏まえた2つの概論を，私たちはいま手にすることができる．ひとつはゲッティンゲン大学で長年正教授を勤めたクラウス・デューウェルによるメツラー文庫の概論である．谷口も参照した1968年の初版はコンパクトであったが，版を重ねるごとにページが追加され，2008年の第4版では初版の倍ほどのページ数に膨れ上がった[33]．本書はルーンの社会史や受容史も含む網羅的な内容であり，ルーン全般に関する簡便な辞書としても機能しうる．もう一つはマイケル・バーンズの単著である[34]．長年ロンドン大学で北欧学を教授したバーンズは，その教育経験をいかし古アイスランド語の教科書を執筆する一方で[35]，上述したようにブリテン諸島全体のルーン碑文の校訂を完成させた．言語的側面に重きを置いたバーンズの概論は，デューウェルの概論とは対照的に，ルーン文字の呪術的側面や社会的側面に対しては幾分ストイックな態度を示す．

第四に国際ルーン会議の開催とその関連雑誌『フサルク』の刊行である[36]．北ヨーロッパ全域に分布するルーン碑文の研究は，それ自体国際性を持つべき対象であったが，個人的な情報交換を超えて定期的に各国の研究者が情報共有をはじめたのは，1982年に始まる国際ルーン会議（International Symposium on runes and runic inscriptions）である．おおよそ4年ごとに開催されたこの会議は，ルーン研究を専門とする研究者による唯一の交流の場として現在まで続いている[37]．会議の参加者もかつては言語学者が中心であったが，今や，ルーンに関心のあるものであれば誰でも参加することが可能となっている．その常連参加者は，国際ルーン会議と同じく中世

33）Klaus Düwel, *Runenkunde*. Stuttgart: Metzler, 1968 (4. Aufl. 2008). 次年度刊行予定の第5版は高弟ローベルト・ネドマによる補筆を受けた改訂版．

34）Michael P. Barnes, *Runes: A Handbook*. Woodbridge: The Boydell Press, 2012.

35）Michael Barnes, and Anthony Faulkes, *A New Introduction to Old Norse*, 3 vols. London: Viking Society for Northern Research, 1999-2001 (sometimes revised).

36）*Futhark: International Journal of Runic Studies* (Oslo / Stockholm, 2010-). オープンアクセス（http://futhark-journal.com/）．

37）会議の様子は，小澤実「第7回国際ルーン会議参加記」『北欧史研究』28（2011）：48-54頁．第8回の成果は昨年刊行された．Mindy MacLeod, Marco Bianchi, and Henrik Williams (eds.), *Reading Runes. Proceedings of the Eighth International Symposium on Runes and Runic Inscriptions, Nyköping, Sweden, 2–6 September 2014*. Uppsala: Institutionen för nordiska språket, Uppsala universitet, 2021. 2022年7月に第9回がドイツで開催された．

北欧に関する国際会議であるヴァイキング会議（Viking Congress）や国際サガ学会（International Saga Conference）の主催者や参加者とも重なっており，それぞれの会議録を参観するならば，各会議の参加者もグローバルとなり方法論や対象も多様になる一方で，北欧中世の研究の一体性をも実感できる．

このような世界のルーン学の流れの中にあって，私たちは『研究序説』をどのように位置づけるべきであろうか．もちろん，日本で最初かつ個人の手になる唯一のルーン概論として，その古典としての価値は永遠不滅であろう．少なくとも本邦で本書を凌駕するルーン文字の総合記述は未だない[38]．1960年代までの成果に基づくその記述の多くは，既に塗り替えられた箇所もある．しかしながら，1冊として網羅性と強度を持つ『研究序説』は，専門家にとってもなお通読や参照する価値はあるし，ルーンとは切っても切れない縁を持つファンタジーや占いなどの愛好者もまた，新しく付加された図版とテキストを見比べながら得るものは少なくないだろう．なお電子化もされていない大学紀要の一部として，半世紀を孤独に待ち続けた『研究序説』は，ここに多くの読者と向き合うことになるであろう書籍として，漸く日本語の読書空間にその地位を得たといえるのではないか．

38）日本語で読める注目すべき概論として，スウェーデン語（Lars Magnar Enoksen, *Runor: Historia, tydning, tolkning*. Lund: Historiska Media, 1998）から翻訳されたラーシュ・マーグナル・エーノクセン（荒川明久訳）『ルーン文字の世界―歴史・意味・解釈』（国際語学社，2007）［『ルーンの教科書―ルーン文字の世界　歴史・意味・解釈』（アルマット，2012）］も上げておくべきだろう．著者のエーノクセンは必ずしも学術的訓練を受けた専門家ではないが，本書を執筆するにあたり，ルーン学の専門家，とりわけデンマーク国立博物館のマリア・ストックロン（Maria Stoklund）によるチェックを受けている．とりわけルーン学の歴史の記述は，デューウェルやバーンズよりも詳細であり参照に値する．